東京学芸大学リポジトリ
Tokyo Gakugei University Repository

中国系ニューカマー生徒の来日事情および適応課題について：中国系ニューカマー生徒の実態調査から

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2011-06-15
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 李,原翔, 佐野,秀樹
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/2309/108096

東京学芸大学紀要　総合教育科学系Ⅰ　62: 265－272，2011.

中国系ニューカマー生徒の来日事情および適応課題について

―― 中国系ニューカマー生徒の実態調査から ――

李　　原　翔*・佐　野　秀　樹**

教育心理学講座

（2010年9月27日受理）

問題背景

近年，中国帰国者生徒が年々減る一方に対して，親の就労や結婚などの事情で中国から来日する十代の子どもが増える傾向にある。中国系ニューカマー生徒①の中に親と共に来日する子どももいれば，親の呼び寄せで来日，または親の都合や教育の事情で日本と中国を行き来する子どももいる。中国人女性と日本人男性の国際結婚ケースの中に，前夫との間の子どもを中国に残し，単身来日した母親が日本人との国際結婚による再婚のケースも多い。日本に子どもを呼び寄せる親の多くは，子どもの来日前の状況を把握していない上に，長く日本にいても，日本語を自由に使いこなせず，日本の教育事情も理解していない。子どもの来日年齢と母国での教育歴によって，日本の学校に編入できないケースもあり，受け入れ態勢の不備や親と学校側の間の意思疎通の欠如などの原因で，一部の子どもは，十分な日本語指導と教育支援を受けられないのが現状である。

現在，高度経済成長を続ける中国では，依然として，理想の大学への進学は将来につながる唯一の道という考え方が根強く，苛烈な受験戦争が年々激しさを増す一方である。学校や教員への業績評価は進学率で決まるゆえ，学校の教育活動や家庭教育は，進学というレバーに操られ，極端に成績が重視されている。教員は進学率を高めるために，教授法を改善するほか，宿題を多く出し，子どもたちに長い勉強時間を要求する。子どもの出世を望む，「望子成竜」という中国の親たちも，子どもの個性や心理状況を顧みず，「成績さえ良ければ」と子どもに激しい受験戦争を勝ち抜くため，勉強漬けの日常に耐える根気ばかりを求める。子どもたちは，生活面で過保護で甘やかされているが，学習面では，常に過度な期待・過干渉，受験のプレッシャーを受けている。一方，近年，世界的金融危機の影響を受け，中国でも大卒者の就職難が深刻化しつつ，“大学不要論”②の台頭に加え，受験のプレッシャーに耐えられない生徒の受験放棄も社会問題になっている。都市部を含めて，一部の地域，とりわけ経済的に裕福でない農村地方では，高校進学，また大学受験をあきらめ，出稼ぎ労働者の道を選ぶ若者が増加している③。

このように社会格差と歪んだ教育理念が広がりつつ，極端に矛盾した教育価値観が同居している中国で教育を受けてきた中国系ニューカマーは，来日後，どのようなカルチャーショックを受け，どのような適応問題を経験するのであろうか。子どもたちは，不本意な文化移動によって来日し，言語や進路選択の壁をはじめ，異なった学校生活スタイル・教育価値観，さらに新たな家庭生活環境，人間関係の変化に惑わされると考えられる。一方，国柄や教育システムの相違，子どもたちの取り巻く生活や教育環境に関する情報不足で，教育支援者側も多くの困難と戸惑いを感じている。これまで，日本における外国人児童生徒の異文化適応と教育支援の研究は，日本語教育・進路指導・学校適応に焦点を当てられてきた（川上（2006[2]），児島（2006）[3]）。中国帰国者生徒を含め，中国系ニューカマーの異文化適応問題について山本（2005）[8]，文化的アイデンティティ形成の要因について趙（2007）[5]の

＊　東京学芸大学大学院　教育方法論講座
＊＊　東京学芸大学　教育心理講座

研究があげられる。また，広崎（2007）[1]は，支援活動を通して，中国系ニューカマー生徒の進路意識と進路選択の多様性を検討し，子どもたちが国境を越えて持越してきている資源をいかし，一人一人にとってより「望ましい」進路選択できるように支援する必要があると述べている。徳永（2008）[4]は，フィリピン系ニューカマー生徒の「来日経緯」と「重要な他者」に焦点を当てて，ニューカマー生徒の高校進学の実現だけを目的にした制度的な支援やその研究の限界を示した。しかし，多くの適応課題に直面するニューカマーの来日事情，文化移動の影響，異文化体験における当事者の視点に言及した研究は，まだ少ないといえる。特に，近年，増えつつある呼び寄せで来日する中国系ニューカマー生徒の実態については，ほとんど研究されていない。外国人児童生徒への教育支援をより有効にするため，かれらの来日事情と適応課題を明らかにし，多様な背景を考慮に入れながら，教育支援の方法を探ることが必要である。

1．研究の目的と方法

1-1　調査の目的

本調査は，在日中国系ニューカマー生徒の実態調査を通して，彼らの来日事情，適応課題の様態，異文化体験などを明らかにすることが目的である。調査の結果を踏まえた上で，文化移動による適応課題を検討し，教育支援のあり方を探りたい。

1-2　協力機関と調査の期間

協力機関：東京都及び神奈川県の公立中学校（夜間学級を含めて，3校）・高等学校（2校），民間の日本語支援教室・国際交流協会（4箇所）などから調査協力を得て，中国系生徒を対象に140人分の調査用紙を配布し，110人分を回収した（回収率78.57％）。欠損値の多い4人を除き，分析対象は106人となった。質問紙は，日本語版と中国語版両方を協力機構に配布したが，92％の協力者が中国語版の質問紙を選んだ。

調査期間：2008年10月から2009年2月まで

1-3　調査内容

質問紙は，フェイスシート・来日経緯・進路志向・親の国籍と定住意思・幸福感と親子関係・異文化適応感尺度と異文化体験についての自由記述から構成されていた。

幸福感（1項目）は，「全然幸せではない（1点）」から「とても幸せ（5点）」の5段階評で，親子関係（3項目）は，来日前後の親子信頼感と親からのサポートについて「まったくあてはまらない（1点）」から「非常にあてはまる（5点）」までの5件法で測定した。異文化適応尺度（28項目）は，山本ら（1986）[7]，稙松（2004）[6]を参考に修正し，作成した。

2．研究の結果

ここに示した結果は，調査項目の一部と異文化適応感について分析したものである。

2-1　調査対象の内訳

所属：全日制中学校22名，夜間中学級28名，支援教室・国際交流協会27名，高等学校29名で計106名（男子54名，女子52名）

学年と年齢：7年生（中学一年生）17名，8年生29名，9年生26名，10年生（高校一年生）11名，11年生8名，12年生10名，学年不明5名

平均年齢16.30歳（標準偏差1.92），最小年齢13歳，最大年齢20歳

調査対象の在住期間と来日年齢：平均在住期間22.32ヶ月（標準偏差22.87ヶ月），在住最短期間3ヶ月，最長103ヶ月

来日平均年齢14.73歳（標準偏差2.22），来日最小年齢10歳，最大年齢19歳

出身地：出身地は，中国の17の省にもおよび，福建省が最も多く，全体の32.2％，続いて，黒竜省と吉林省など東北地方の出身は27.7％，江蘇省9.4％，上海7.5％であった。

2-2　来日事情

来日時期：月ごとに来日するニューカマーがおり，それぞれの時期に波があった。最も集中したのは8月（17人）・7月（16人）と6月（11人）の三ヶ月で，少なかったのは2月（6人）・10月と12月（それぞれ3人）であった。

この傾向から，中国系ニューカマー生徒の来日時期は，日本の学校開始時期より中国の学期終了に合わせることが多いのが分かった。また，年間を通して，どの時期にも来日する生徒がおり，来日事情の複雑さと子どもの学校編入や進学問題に対する親の配慮のなさ，あるいは配慮する余裕のなさをうかがわせた。

来日形態：親と同行して来日生徒17名（16.04％），呼び寄せで来日生徒83名（78.30％），無回答6名

（5.66％）

来日まで親と離れていた年数（回答者74人）：1年以内24人（32.43％），2年から3年まで24人（18.92％），4年から5年まで32人（43.24％），7年3人（4.05％），10年1人（1.35％）

以上のデータから呼び寄せで来日したニューカマーの三人に一人は，来日まで少なくとも4年以上親と離れて暮らしていたことが分かった。

親の国籍：

父親：中国（65人），日本（39人），無回答（2人）

母親：中国（92人），日本（11人），無回答（3人）

親の定住意思：

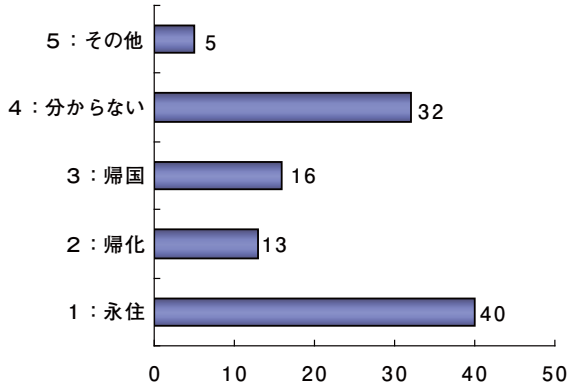

図1：親の定住意思（106人）

106人の中，53人（50％）の親は日本に永住また帰化を望むのに対して，16人（15.09％）の親は，中国に帰りたい意思を示した。一方，32人（30.19％）の生徒は，今後の生活計画について親の考えを知らないと答えた。

中国系ニューカマー生徒の進路志向：

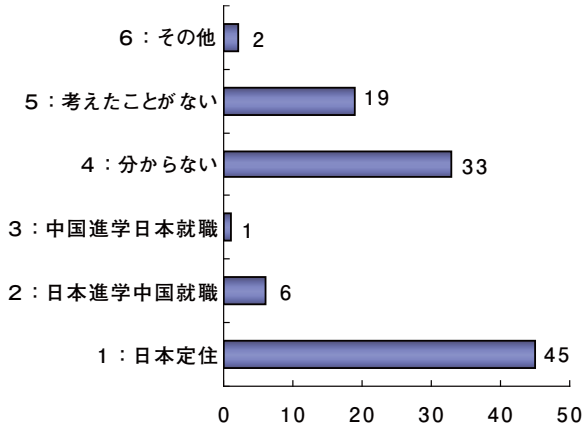

図2：中国系ニューカマー生徒の進路志向（106人）

106人の中に，45人（42.45％）は，将来日本に定住することを表明したのに対して，52人（49.06％）の生徒は，分からない・考えたことがないと答えた。また，日本で進学，中国で就職，あるいは，その反対の進路選択肢を考えている生徒もいた。

親子関係：

成績や生活面でよく親に注意されるかについて，来日前の46.34％から来日後の35％まで減少したが，あまり注意されないと全く注意されないとの回答者は，来日前の30.49％から38.75％までに上昇した。困ったことがあっても親に頼らず，自力で解決しようとする自立意識は，来日前と比べてやや弱まった。一方，落ち込んでいるとき親からのサポートについては，精神的によく支えてくれるとの回答者は，来日前の37.8％から来日後の27.50％までに落ち込み，なんとも言えないとの回答者は，来日前の13.51％から来日後の31.25％まで上昇した。

子どもたちの自立性は，来日によって低下する傾向にあるが，来日後親からの注意・干渉，またサポートも来日前と比べて，著しく減ってきた。

幸福感：

現在について，とても幸せとやや幸せの回答者は，合計45人（42.45％），来日前と比べてあまり変わらないとの回答者は39人（36.8％），あまり幸せではない（18人）と全然幸せではない（4人）の回答者は，合計22人（20.75％）であった。

子どもの幸福感と親の支援との間に比較的強い正の相関（$r = .42^{**}$），子どもの進路志向と親の定住意思との間にやや正の相関（$r = .38^{**}$）がみられた。（$P < .01^{**}$）

2-3　異文化適応の分析結果

先行研究を参考に作成した「異文化適応尺度（28項目）」について因子分析を行った。分析は主因子法で，プロマックス回転によって行った。因子負荷量の低い項目や複数の因子に高い負荷量を示した項目を除き，23項目で再び主因子法で因子分析（プロマックス回転）を行い，4因子を抽出した（表1）。

第1因子は“日本語で大抵の会話は自由にできる”“日本語の習得は進んでいる”“日本人との人間関係に満足している”など言語能力からなり，「言語適応感」と名付けた。第2因子は“日本の文化を理解している”“日本人ともっと知り合いたい”“日本の文化に親しんでいる”など異文化への理解と親近感からなり，「異文化親和感」と命名した。第3因子は“日本での生活は不安になることが多い”“イライラして落ち着かな

表１　「異文化適応感」の因子分析結果（プロマックス回転後）と因子間相関

		Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	共通性
	第Ⅰ因子　言語適応感　（α＝.85）					
14	日本語で大抵の会話は自由にできる	.974	-.191	-.204	-.070	.635
5	日本語の習得は進んでいる	.648	.205	-.156	-.044	.578
13	学習の進行は順調である	.625	-.129	.130	.067	.561
10	日本語であっても大抵のことは聞き取れる	.581	.188	-.193	.120	.597
1	日本人との人間関係に満足している	.560	.101	-.069	.189	.599
15	日本の社会制度がどういうものかわかっている	.485	.294	-.019	-.151	.568
21	大抵の場面では日本語を使いこなしている	.437	.169	.097	.107	.573
23	心身ともに良好である	.421	.062	.303	.054	.509
27	思うように勉強できている	.374	.106	.077	.018	.403
	第Ⅱ因子　異文化親和感（α＝.71）					
26	日本人ともっと知り合いたい	-.066	.653	.093	.069	.464
4	日本人の友人がいる	-.094	.611	-.191	.295	.589
6	日本の文化を理解している	.305	.603	.060	-.037	.675
18	日本の生活習慣や文化に不満がある	.073	.497	.181	-.316	.409
25	日本の文化に親しんでいる	.209	.424	.002	.100	.494
	第Ⅲ因子　情緒と自己受容（α＝.70）					
12	日本での生活は不安になることが多い	-.138	.187	.723	-.005	.478
17	イライラして落ち着かない	.001	-.117	.586	.093	.496
19	日本人に接する時はどこか無理をしている	-.040	.287	.538	-.050	.457
7	日本人の前では自分らしく振舞えない	-.160	-.074	.450	.067	.352
20	最近すぐ落ち込む	.287	-.013	.429	.106	.516
	第Ⅳ因子　学校生活と支援者（α＝.72）					
22	信頼できる日本人がいる	-.186	.362	-.169	.690	.551
9	学校生活に満足している	.083	-.066	.287	.603	.529
3	学校生活は充実している	.305	-.162	.021	.531	.547
16	何かあったとき相談できる人がいる	.109	-.062	.212	.484	.497
	Ⅱ	—	.479	.417	.467	
	Ⅲ		—	.235	.364	
	Ⅳ			—	.143	
					—	

い”“日本人に接する時はどこか無理をしている”など情緒面からなり，「精神的安定感」と命名した。第４因子は“信頼できる日本人がいる”“学校生活に充実している”“何かあったとき相談できる人がいる”など学校満足感と支援者からなり，「学校生活と支援者」と名付けた。

本調査では，中国系ニューカマー生徒の異文化適応様態について，「言語適応感」「異文化親和感」「精神的安定感」「学校生活と支援者」の四つの側面を見受けられた。この４つの因子は，親の在住事情のみとの関連がみられたが，子どもの性別・学年・在住期間・来日経緯・在籍学校との関連は見出せなかった。

２-４　異文化体験の自由記述

中国と日本の学校生活や先生の違いについて自由記述項目が設けた。中国については，「一日中ほとんど学校にいる。学校生活の中心は，勉強」「先生は一生懸命教え，生徒は一生懸命勉強する」「先生はとても厳しい，私たちを評価するのは成績だけ」「勉強の雰囲気は日本より張りつめていて，授業中の紀律は比較的良い」のような記述に対して，日本では「一日の授業時間が短く，宿題も少ない。楽」「行事や活動が多く，中国より学校生活がずっと豊かになった」「中国より個性を伸ばすことに比較的力をいれている」「先生は優しく，成績に関係なく生徒を平等に取り扱う」

「先生は，学生がわかるまで熱心に説明してくれて，とても真面目」「中国の先生より管理はゆるい」「学校では重要な知識を教えず，授業は散漫すぎる」との対照的な体験がみられた。

一方，帰宅が早くなったことで，家庭学習の平均時間は１時間にもならず，帰宅後や週末「テレビ・パソコンゲーム」「インターネットでチャット」で時間を費やす子どもの多さも目立った。親子関係について，来日によって「親との共通話題が多くなった」「親と一緒に暮らすことができて，幸せ」と対照に「親と話すことがない」「毎日勉強しなさいしか言葉がない。うんざり」「親が忙しくて，話す機会が少ない」「大人が子どもは日本語を学ぶのは容易だと言うことに圧迫感を感じている」「家族が日本と私を理解しようとしない」「親との関係がますます悪く，家がつまらない」のような体験も多くみられた。

３．まとめと考察

本調査を通して，中国系ニューカマー生徒の来日事情のいくつかの特徴を見出した。来日する子どもの出身地や来日時期・来日年齢のばらつきが多い上，家庭事情も複雑であった。子どもたちは，日本語習得や学校生活への適応だけでなく，新たな生活環境と家族関係の適応も強いられるが，子どもたちの大変さを理解していない親が多いようだ。一方，長い期間において異なった環境で生活していたため，親子互いに相手の生活習慣や考え方も受け容れ難いものも多くある。また，将来どこで生活するかについて親子の共通認識が乏しく，来日や進路選択に対する子どもの動揺も多く見受けられた。今後，異文化環境における思春期の親子問題，国際再婚家族内の様々な衝突が新たな異文化適応課題として浮かび上がってくるのではないかと予測される。教育システムの違う異国で教育を受けることは，子どもだけでなく，親にとっても大きな試練である。学校生活や進路指導について，親の協力と共通認識が必要であり，日本と母国の教育事情の違いや進路指導の理念について親に理解してもらうことも重要である。現在の中国の教育事情と中国系ニューカマーの取り巻く環境から，かれらの進学進路指導も教育現場にとって大きな課題になると予想される。これは，外国人児童生徒の受け入れ枠の拡大だけで解決できる問題ではないともいえる。

本調査では，中国系ニューカマー生徒の異文化適応様態について，「言語適応感」「異文化親和感」「精神的安定感」「学校生活と支援者」という４因子を見出した。子どもの異文化適応において，言語習得のほか，安定した人間関係，在住国に対する親近感，そして学校文化の違いに対する理解なども重要な要因と考えられる。学校生活スタイル・教育方針・教師と生徒の関係において日本と中国の間に大きな文化差がある。それぞれの文化と社会の相違のありようへの気付き，とらえかたは，子どもたちの成長や適応具合に大きく影響すると考えられる。相手の文化を尊敬し，敬意をもって学ぼうとする姿勢が異文化適応に欠かせないものであろう。外国人児童・生徒に日本語学習や教科学習のサポートを提供すると同時に，異文化理解と異文化適応能力の向上に関する教育支援も重要である。今後，外国人子どもの受け入れ制度や教育支援施策を改善する際，かれらの来日事情，おかれた状況に関する子ども自身の受け止め方，親子の教育価値観の持ちかたなどを視野に入れながら，検討する必要があろう。

〈注〉

① 中国系ニューカマー生徒：国籍に関わらず，中国から来日し，中国にルーツをもつ子どもの総称。なかに中国帰国者三世，国際結婚の家庭で生まれた子ども，国際結婚による連れ子，または親の就労，留学などで来日する子どもを含む。

② 「“大学不要”万人が受験放棄　賛成77％」『社会ニュース Searchina 2009年４月６日

③ 「2.6万人大学受験放棄の要因分析」『武漢朝刊』2009年４月14日

〈引用参考文献〉

1）広崎純子（2007）「進路多様校における中国系ニューカマー生徒の進路意識と進路選択」『教育学社会研究』第80集　日本教育社会学会　227-245

2）川上郁雄（2006）『「移動する子どもたち」と日本語教育』 明石書店

3）児島　明（2006）『ニューカマーの子どもと学校文化』 勁草書房

4）徳永智子（2008）「「フィリピン系ニューカマー」生徒の進路意識と将来展望」異文化間教育学会編『異文化間教育』第28号　異文化間教育学会　87-99

5）趙　衛国（2007）「中国人高校生の異文化適応過程―文化的アイデンティティ形成の要因に注目して―」『東京大学大学院教育学研究科紀要』第47巻

6）植松晃子（2004）「日本人留学生の異文化適応の様相：滞

在国の対人スキル，民族意識，セルフコントロールに着目して」『発達心理学研究』第15巻，第３号　313-323
7）山本多喜司ら（1986）「留学生活における適応尺度」『心理尺度ファイル』垣内出版　1994，582-587
8）山本 彰子・本間 友巳（2005）中国帰国中学生の異文化適応に関する研究―ストレッサー・有能感・「文化受容態度の関連から見た特徴 」[in Japanese]『教育実践研究紀要』(5) 京都教育大学附属教育実践総合センター　155-164